

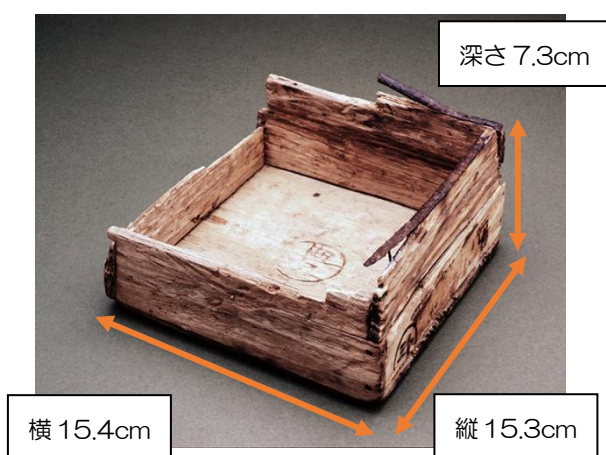
# 検地の道具と記録

とよとみひでよし

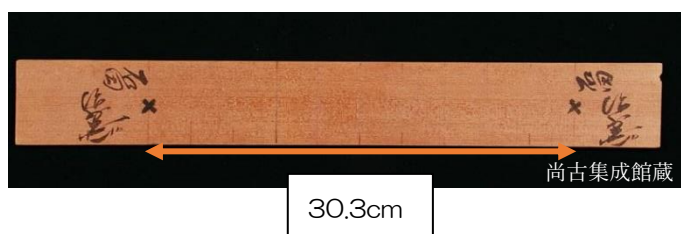
豊臣秀吉は、天下を統一してまもなく、検地を行いました。検地をするために、秀吉は長さや米の量を測る単位を統一し、全国の田畑を調べて記録しました。現在に残る、検地に使われた道具やその記録について調べてみましょう。

## 統一された、ますとものさし

ますとものさしを統一したことで、全国の田畑の面積や納める年貢米の量を同じ基準で測ることができるようになりました。検地によって、米の正確な収穫量がわかるようになってからは、土地を石高という単位で表すようになりました。現在の1石は約150kgで、1年間に大人一人が食べる米とほぼ同じ量です。



↑ア ます（京ます 大阪府教育委員会提供）  
大阪城のあとから出土した1升（10合）をはかるますです。現在の一升ますと比べると、少し小さい1708㎤です。



↑イ ものさし（検地尺 尚古集成館蔵） ×印の間が1尺（30.3cm）で、1寸ごとに線が引かれています（1尺=10寸）。豊臣秀吉の家臣の石田三成のサインが書かれています。

## けん ち ちょう 検地帳

資料ウは、検地が実施されたときに作成された検地帳です。検地帳には、作物が育ちやすい田畑かどうかという、よしあしを上中下などで示したほか、とれる米や作物の量、耕作者の名前などが書かれています。

村ごとにこうした検地帳がつくられることによって、それぞれの地域の生産力がわかるようになりました。検地帳には、米以外の作物をつくる畑についても記録されました。



↑ウ 検地帳（東京大学史料編纂所蔵）